

日本文学と幸福：梶井基次郎の幸福観

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三田, 誠広 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/916

日本文学と幸福

——梶井基次郎の幸福観

三田 誠広

一、梶井基次郎の生涯

まずはじめに、梶井基次郎の生涯について、簡単に語っておきたい。

梶井は一九〇一年（明治三四年）に生まれた。二十世紀の最初の年に生まれたのだ。

同世代の作家にどのような書き手がいるかを見てみよう。

川端康成が一九九九年の生まれ。同じ大阪府の出身で、川端は茨木中学、梶井は北野中学で、東京でいえば中野と吉祥寺くらいの距離だ。川端は一高（東大の教養課程にあたる）から東大に進んだ。梶井は三高（京大の教養課程）から東大に進んだ。二人の人生は、ところどころでクロスオーバーしている。

川端は一高時代に伊豆を旅して、のちに『伊豆の踊子』を書いた。修善寺から下田街道を湯ヶ島に向かい、最後は下田で踊

子と別れる物語だ。その後も川端は湯ヶ島に長く逗留していた時期がある。

梶井は結核の悪化で、大学卒業を断念し、二十五歳の時に転地療養のために湯ヶ島に向かった。そこで川端と出会って、交流が始まった。

この湯ヶ島での滞在から、『桜の樹の下では』『闇の絵巻』『交尾』などの名作が生まれることになる。

交流のあった作家としては、中谷孝雄、外村茂、武田麟太郎、淀野隆三、飯島正、三好達治、北川冬彦、横光利一、阿部知二、丸山薫、宇野千代らの名が挙げられる。梶井は高校は京都の三高、大学は東京大学で、友人と同人誌を作るなど、仲間と創作活動を続けていた。同世代の作家志望の若者たちとも交流があった。

しかし湯ヶ島での川端との交流が、梶井に大きな影響を与えたことは確かだろう。川端はすでに若手作家として認められ、

ちょうど単行本『伊豆の踊子』の校正をしているところだった。梶井はその作業を手伝ったと伝えられる。同じ大阪府出身の二歳年長の若手作家の活躍は、梶井にとって大きな刺激になったに違いない。

川端康成は七十二歳まで生き、多くの作品を残し、ノーベル賞まで受賞した。これに比べれば、三十一歳で亡くなった梶井基次郎の人生は、あまりに短い。そのことは否定できないのだが、残された作品を見る限り、梶井の存在感は川端にも劣っていない。

梶井基次郎は大阪市内で生まれた。西区土佐堀通というところで、商都の中心地といっている。父は商家の出身で、安田財閥系の第三銀行に勤務し、次男の基次郎が生まれた当時は、系列の貿易会社安田運搬所に配属されていた。母も幼稚園の保育母をしていたというので、豊かではないが中流の生活ができるはずだったが、父には遊蕩癖があり、同じ年に異母弟が生まれるなど、家計は楽ではなかった。

母は教養があり、古典の和歌や物語を子どもに読み聞かせていた。少年のころから梶井は文学的な教養を身につけていたのだ。

八歳の時に父が安田商事東京支店に配属され、一家は上京して芝区（現・港区）に住む。このころから父は仕事上の不満から酒びたりとなり、異母弟と母親も上京してきたことから、家計がさらに苦しくなっていく。

十歳の時に父が安田系の鳥羽造船所に転勤。一家も三重県鳥

羽町（現・鳥羽市）に転居。のちにいくつかの作品で描かれる三重県との縁ができる。三重県立第四中学に入学し、ここで西洋音楽に触れた。

十二歳、父は大阪の安田鉄工所に転勤。一家も大阪市北区（のちに西区）に転居し、梶井は北野中学に転入した。

十五歳、異母弟が奉公に出されたことに抗議して、自分もメリヤス問屋に奉公に出る（一年後に復学）。この年、父は退職してビリヤード店を開業した。

十八歳、三高入学。当初は工業高校入学を検討したこともあり、三高でも理科系のクラスだった。三高は京都大学に隣接していて、大学生との交流もあった。そのころから文学に目覚め、とくに志賀直哉、武者小路実篤らの白樺派に興味をもっていたが、相馬藩の大名の家系であった志賀も、京都の公家の家系だった武者小路も、貴族の子弟が通う学習院の出身だった。商家の生まれの梶井は、わが身をかえりみて「町人根性」と自虐的になることもあった。

梶井は西洋の文化に憧れ、強いプライドと向上心をもっていた。そのころから詩作に励むようになっていたが、勉学も創作もたやすくは思い通りにならない。実家の家計が傾いてもいたので、贅沢はできなかつたが、エンピツ、ポマード、オーデコロンなど、ささやかな出費で舶来品を手元に置き、プライドを満たしていた。そうしたちよつとした贅沢に、梶井のダンディズムを見てとることができる。

三高入学直後から微熱に悩まされていた梶井は、十九歳の時

に肋膜炎と診断され、療養のために姉が嫁いでいた三重県の山間部に転地したのだが、病は進行して肺尖カタルの診断を受けた。学問を止めて養生することを勧める母の反対を押し切って京都に戻り、学業を続けた。

そのころから梶井の生活は荒れ始めた。甘栗屋の釜に牛肉を投げ込んだり、ラーメン屋の屋台をひっくり返したりという、デカダンスふうの愚行を重ねた。

高い志と、プライドに対して、微熱をかかえた体が思うようにならないことへのもどかしさから、酒に溺れたこともあった。そのころの心情は、代表作の『檸檬』に集約されている。

大正十三年（一九二四年）、二十三歳になった梶井は、東大英文科に入学する。本格的に文学を学ぼうと決意したようだ。この年の七月、三歳の異母妹が結核性脳膜炎で死去する。その見舞いの帰途、三重県松阪市に移っていた姉のもとに寄り、養生を兼ねてしばらく滞在した。この時の体験がのちに『城のある町にて』に結実する。

東京に戻った梶井は、画家のポール・セザンヌに心酔していたこともあって、瀬山極という筆名を考え、私小説とも散文詩ともとれる短い断章を重ねた『瀬山の話』という作品を構想していたのだが、完成できなかった。

友人たちとともに『青空』という同人誌の発刊が計画されていた。『瀬山の話』を仕上げるのができなかった梶井は、その中の断片的なスケッチのようなものを友人たちに見せた。これが創刊された『青空』の巻頭を飾ることになる。名作『檸檬』

の誕生だ。

この作品は友人たちには好評だったが、ただちに文壇で認められたわけではない。病状が進行し、血痰が見られるようになったため、梶井はやむなく卒業を断念して、転地療養のために湯ヶ島に赴く。ここで川端康成との運命的な出会いがある。梶井二十五歳、川端は二歳年長の二十七歳だった。

湯ヶ島には友人たちも訪ねてきたが、ここで詩人の萩原朔太郎、文芸評論家の広津和郎、小説家の尾崎士郎らと面識を得る。ことに尾崎夫人であった宇野千代には心を動かされたようだ。

その後も同人誌に作品を発表し、文壇づきあいも続いていたのだが、体の衰弱がいよいよ激しくなり、二年後に大阪の実家に帰った。二十七歳。梶井の余命も残り少なくなっていた。『青空』は廃刊となったが、友人の詩人、北川冬彦、三好達治らの同人誌「詩・現実」に、『愛撫』、『闇の絵巻』を発表。

文壇での評価はしだいに高まり、三十歳の時に初めての作品集『檸檬』が発刊された。

翌年には商業誌の「中央公論」に『のんきな患者』を発表する。その翌月には同じ「中央公論」で小林秀雄が梶井の作品を論じるなど、ようやく作家として世に認められるようになったのだが、その矢先、梶井は三十一年の短い生涯を終えることになった。

宮澤賢治、金子みすゞなど、死後に評価された文学者は少なくない。これに比べれば、梶井基次郎は最晩年にわずかながら文壇で評価されるという栄光の時期を体験したのだが、それだ

けに病が進行することに無念の思いを抱きながら死んでいったのではないかと思われる。遺作となった『のんきな患者』に見える静かな諦念と、とぼけたユーモアが、読者の救いとなっている。

二、作品に表現された幸福観

梶井基次郎は「幸福」とは縁遠い人生を送った。青年期にすでに病に冒され、微熱と咳、息苦しさ、疲労感に悩まされた。何をやっても集中力が持続せず、勉学も創作も思うようには進まなかった。それでも友人に恵まれ、京都の三校時代から同人誌を発刊し、短篇と散文詩に近い掌篇の発表を重ねた。代表作の『檸檬』はその初期に発表された。ここではまず『檸檬』の冒頭から読み込むことで、梶井基次郎の幸福観を探ってみたい。作品の冒頭には熱病に冒された絶望感と不快感が示されるのだが、すぐに次のような文章が続いていく。ここには梶井の嗜好とセンスが示され、幸福観につながる緒のようなものが見えている。

私はまたあの花火という奴が好きになった。花火そのものは第二段として、あの安っぽい絵具で赤や紫や黄や青や、様ざまの縞模様を持った花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき、それから鼠花火というのは一つずつ輪になっていて箱に詰めてある。そんなものが私の心を唆った。

それからまた、びいどろ、という色硝子で鯛や花を打ち出してあるおはじきが好きになったし、南京玉が好きになった。またそれを嘗めて見るのが私にとって何ともいえない享楽だったのだ。あのびいどろの味ほど幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼児のあまい記憶が大きくなって落魄した私に蘇ってくる故だろうか、全くあの味には幽かな爽かな何となく詩美といったような味覚が漂って来る。

ここから主人公は京都の市中をさまよい歩く。どこへ行くという目的があるわけではない。あてもない彷徨だが、たとえば洋書や輸入雑貨を並べた丸善のようなきらびやかな場所には、気が滅入って近づけない。主人公がたどりつくのは、うらぶれた果物屋だ。商店街のはずれの暗がりの中に、裸電球に照らし出された果実の原色が鮮やかにうかがいあがる。そこで主人公は一箇のレモンを買い求める。手に取ったレモンの冷たさが微熱のある身には心地よく感じられる。主人公はそのレモンを懐に入れて、近づくことのできなかった丸善の店内に入り、画集を積み上げてその上に置く。そのまま店を出た主人公は、あのレモンが爆弾だったら、といったある意味では邪悪な、しかし子どもじみた無害な想像に耽る。

主人公は本物の爆弾を仕掛けたわけではない。想像の中で、かつて自分が憧れ、手に入れたいと願っていた西洋文化を木っ端微塵に粉碎したいという切実な思いを表明したのだ。この

『檸檬』という作品のラストシーンは、一種の言葉による暴力的な表白なのだが、そこにこそ作者の切実な思いが凝縮されていて、多くの読者の胸を撃つことになる。熱病に冒された梶井には、時間をかけて西洋文化に接近し、わがものにするといった段階的なアプローチは不可能に近い。彼に残された時間はあまりにも短いのだ。必然的に、彼の思いは屈折したものになっていく。その屈折が逆説となり、レモン爆弾などというやや危ない発想につながったのだろう。

梶井基次郎の作品の中に、「幸福」という言葉が直接出てくる箇所がある。それは『冬の日』という中期の作品だ。ここでは梶井の分身と思われる堯という人物が、東京の街をさまよい歩く。まずは冒頭の文章を見てみよう。

季節は冬至に間もなかった。堯の窓からは、地盤の低い家々の庭や門辺に立っている木々の葉が、一日ごと剥がれてゆく様が見えた。

ごんごん胡麻は老婆の蓬髪のようになつてしまい、霜に美しく灼けた桜の最後の葉がなくなり、檸檬が風にかさかさ身を震わすごとに隠れていた風景の部分が現れて来た。

もう暁刻の百舌鳥も来なくなった。そして或る日、屏風のように立ち並んだ桎の木へ鉛色の掠鳥が何百羽と知れず下りた頃から、だんだん霜は鋭くなって来た。

例によって緻密な自然描写が見られる。自然といっても、山

奥の大自然といったものではなく、都会の中の自然だ。昔ほどの家にも小さな庭があり、樹が生い茂っていた。そこに百舌鳥や掠鳥などの小鳥がやってくる。

すでにおなじみの「堯」という人物が主人公だ。

三人称主観小説という、私小説に特有のスタイルをとっている。一人称を用いずに、主人公を名前で呼びながら、風景や自然の描写はすべて、主人公の目と感性でとらえていく。「堯」という主語を「私」に変換しても文章に乱れは生じない。それくらいに主人公にぴたりと寄り添って書くのが私小説の典型なのだ。

病が進み、長い散歩もできなくなった主人公は、窓から戸外を眺めていることが多くなった。右の冒頭部分に続くのは、こんな文章だ。

冬になって堯の肺は疼んだ。落葉が降り溜っている井戸端の漆喰へ、洗面のとき吐く痰は、黄緑色からぶい血の色を出すようになり、時にそれは驚くほど鮮やかな紅に牙えた。

梶井の観察力は、自分の吐く痰にまで及ぶ。痰に血が混じるというのは、死が迫っていることを示すものだが、梶井はただ淡々と、冷静に目に映るものを描写していく。

これが梶井基次郎の文章術だ。余計な説明は加えない。内面の吐露は極力、封印して、描写に徹する。意思も感性もまたな

い無機的なカメラになったように、梶井はカメラに映った映像を克明に文字に刻み込んでいく。

痰に血が混じっているのを、ただじっと見つめ、金魚みただと思ったりする。

梶井の作品としてはやや長めのこの作品は、いくつかの章に分けられている。一つの章は短いのだが、章に分けることで、時間としても、気分としても、切り替えができる。そのことで、主人公が置かれた状況が、多角的にとらえられている。

風景描写から始まる冒頭の章の次には、母から届いた手紙に始まる省察の章が続く。

いまの一年は後の十年だ、という医者と言葉について、これは数年で死ぬという意味だと考え、なぜはつきり言わないのかと慨嘆したりする。

このように、ストリートに病氣について考察するのは、梶井の全作品の中でも稀少な箇所になっている。

しかしこうした省察は長くは続かない。あまりに理屈が続くと、小説ではなくなってしまう。

小説で大事なものは、イメージであり、「発見」だからだ。

次の第三章では、再び丹念な風景描写が続く。

低地を隔てて、谷に臨んだ日当たりのいいある華族の庭が見えた。黄に枯れた朝鮮芝に赤い蒲団が干してある。

――堯はいつになく早起きをした午前にうつとりとした。

しばらくして彼は、葉が褐色に枯れて落ちている屋根に、

つるもどきの赤い実がつややかに露^あわれているのを見ながら、家の門を出た。

風もない青空に、黄に化^かりきった公孫樹^{いちょう}は、静かに影を畳んで休^{やす}ろうていた。白い化粧煉瓦を張った長い塀が、いかにも澄んだ冬の空気を映していた。その下を孫を負ぶつた老婆がゆっくり歩いて来る。

堯は長い坂を下りて郵便局へ行つた。日の射し込んでいる郵便局は絶えず扉が鳴り、人びとは朝の新鮮な空気を撒き散らしていた。堯は長い間こんな空気に接しなかったような気がした。

彼は細い坂を緩^{ゆる}りゆくり登った。山茶花^{さざんか}の花や、つでの花が咲いていた。堯は十二月になつても蝶がいるのに驚ろいた。その飛んで行つた方角には日光に撒かれた虹の光点が忙しく行き交うていた。

「痴呆のように幸福だ」と彼は思った。そしてうつらうつら日溜まりに屈まっていた。

まことに精密な充実した描写が続いていく。多忙な現代人にとつては、あるいは繁雑な、詳しすぎる描写と感じられるかもしれない。

いまの一年は後の十年だ、という医者と言葉が先に引用されていた。これは療養中の一年は大事で、元氣になつた時の十年に匹敵するということで、それくらいに一日一日を大切にして養生に努めないといけないと医者は言いたかつたのだろう。

だがこの言葉は、死に近い病人の一年は、健康な人の十年に匹敵する、というふうにも受け取れる。

この時は、なぜ命が短いと率直に言わないのかと、医者を批判するようなことを思った主人公だが、医者に言われるまでもなく、主人公すなわち梶井は、一日を、一時間を、十倍の密度で生きたいと思っていたのだろう。

ありふれた風景も、数年後には、見られなくなる。だからこそ臉の奥に刻みつけるようにして、梶井は目に映るもののすべてに目を凝らしていく。

右に引用した部分の最後には、主人公の内面のうめくようなつぶやきが記されている。

「痴呆のような幸福だ」と彼は思った。

そのように梶井は記している。

どこにでもあるような郵便局のにぎわいが、いかにも新鮮なものに感じられる。

坂道から見える花の一つ一つが、うるわしいものに見える。

一匹の蝶にも、驚異を覚える。

その蝶が飛んでいく先では、日の光を受けて、飛んでいる虻がきらきら光っている。

梶井はそれを、幸福と感じる。ただ素直に幸福と言いきってしまうには、気恥ずかしさがあつたのだろう。「痴呆のような幸福」と、皮肉まじりの言い方をして、いくぶん自虐的になつてみせる。

そして主人公は、作品の結びの部分で、「大きな落日が見たい」

という願望を抱く。

しかしその願望は容易には実現しない。主人公が立っているのは飯倉片町であり、そこは麻布台と呼ばれる台地の南東にあつた。そこから落日を見るためには、青山を越えて渋谷のあたりまで行かなければならない。肺病の微熱をかかえた主人公にとっては、達成されることのない願望なのだ。梶井の束の間の幸福観は、たちまち色褪せていく。

梶井基次郎が生涯に書き遺した作品の数は、けつして多くはない。しかしその短い生涯の中で、彼は数多くの「発見」を作品の中に提示している。玩具の花火の彩り、ビー玉の感触もその一つだ。積み上げられた画集の上のレモン爆弾の輝きは、最も印象的なものの一つだろう。梶井は残り少ない時間を惜しむように、風景や事物を凝視して文章に写し取っていく。梶井の描写のすべてが、梶井にとつては大きな喜びであり、幸福であつたのだろうとわたしは考える。